

ケイトリン・コーカー著 『暗黒舞踏の身体経験——アフェクトと生成の人類学』

武藤大祐

土方巽の創始した「暗黒舞踏」（以下「舞踏」）の身体技法に、人類学的な観点から肉迫した力作である。

舞踏の技法に着目した研究としては、三上賀代『器としての身体——土方巽・暗黒舞踏技法へのアプローチ』（1993年／増補改訂版2015年）という不動の里程碑がある。みづから土方に師事し、その稽古場での実践を直接の対象として考察した三上の研究は、上演の分析のみによっては決して手の届かない身体技法の細部に光を当て、舞踏への理解を質的に更新した。

コーカーの研究はこの道をさらに先へ進むものである。1970年代以降の土方は、踊り手が他の何かに「なる」という、身体変容によって動きを作り出す手法を確立したが、著者はこれを身体経験として記述的に解き明かそうとするのである。舞踏における身体の変容、すなわち「なること」とは、対象の外形の模倣でもなければ、記号的な再現でもなく、すぐれて感覚的な出来事である。これを客観的に記述することの難しさは、少しでも舞踏を知る者なら誰でも首肯するところだろう。またその捉え難さ自体が舞踏の強烈な魅力であることも確かだろう。それゆえ舞踏は容易に秘教化し、スピリチュアルな言説にも覆われやすい。しかしそうした、合理的な説明を拒むかのような舞踏の性質にも、諸々の要因は存在する。それを仔細に見つめ、説明することはできるはずである。

そこで著者が導入するのが、ドゥルーズ&ガタリのアフェクト論である。アフェクトは「情動」と訳されることもあるが、前言語的なレベルで身体が受け取る力、そして身体から（他の身体に）及ぼされる力を意味する。例えばドゥルーズ&ガタリは、子供が馬から受けるアフェクトについて、「遮眼帯で目をふさがれていること、轡と手綱のせいで自由がきかないこと、誇り高いこと、大きなおちんちんをもっていること、重い荷を引くこと、鞭で打たれること」等々をあげている（『千のプラトール』）。これらは「馬」の表象や概念や記号とは異なり、子供が馬から主観的かつ身体的に感受する断片的な印象である。著者によれば、舞踏の稽古においても、こうしたアフェクトの水準で踊り手の動きは生成される。正確にいえば、複数の身体の間をアフェクトが流動することで様々な動きや体の状態が生成される。例えば「背中に滝」があるというイメージが踊り手に与えられる

時、その様子を再現的に演じることが求められるわけではない。背中に滝がある状態を想像し、そこから「垂直」や「垂れ下がる」アフェクトを感受することで、身体が変容し、さらにそうしたアフェクトを自ら発すること（すなわち「なること」）が主眼なのである（237）。ドゥルーズ&ガタリもまた、アフェクトの増幅や拡大を通じて自己が他の何かに「なる」ことを「生成変化（devenir）」と呼ぶが、ここに土方巽とドゥルーズ&ガタリに共通のテーマがある。おそらくこれは多くの人々が気づき、指摘もしてきたことだろう。しかし著者の研究のユニークさは、ドゥルーズ&ガタリが抽象的に論じる「生成変化」が実際にはどのような現象なのかを、舞踏の稽古を通じて具体的に記述しようとする点にある。これにより、土方舞踏の技法と、ドゥルーズ&ガタリの理論とが、互いに新たな照明を与え合う関係に置かれるのである。

本書は四部構成、全十章からなるが、まず第一部で著者の調査対象である舞踏ワークショップの概要が示された後、短期間の「ワークショップの調査だけでは、暗黒舞踏の身体性、言葉、そしてアフェクトを理解することはできない」（80）との考えから、第二部では1970年代における舞踏の実践がオーラルヒストリーの形で人類学的に記述される。小林嵯峨、正朔、和栗由起夫、室伏鴻、山本萌、ビショップ山田などによる語りから、舞踏に関わった人々がどんな経緯で土方のもとに集まり、どんな生活を営んでいたのかといった、舞踏の生態系とでもいうべきものが整理され（第四章）、また彼らの重要な収入源であったキャバレーでのショー・ダンスの活動についても同様に記述される（第五章）。ここから著者は「社会性や自由な私生活を放棄した」共同生活の中でこそ舞踏家たちは肉体への意識を培うことができたのだろうと洞察する（100）。

「キャバレーもアスベスト館も一般社会規範からかけ離れた場所であったからこそ、一般的生活ではあり得ない肉体への意識が生じた」（115）。そして社会規範から外れた舞踏家たちはある種の「いかがわしさ」を身にまとっていた。しかしこの「いかがわしさ」とは、社会や様々な属性の外に在ることを意味しないと著者はいう。そうではなく、「むしろ社会的属性や諸アイデンティティの中間に生きている」ということ、言い換えれば、「物質としての肉体が、一つの属性で十分満

たすことができない」ということ、つまりは「複数の異なる属性や状態を経験できる」ことを意味する(115)。いわゆるアングラ時代の舞踏家たちの「いかがわしさ」を、単なる文化論に落とし込まず、身体技法や身体観の生成の環境として捉える著者の見通しには明快な一貫性がある。このような洞察が、その密度において1970年代とは大きく異なる今日の「ワークショップ」という文脈における舞踏の稽古の観察を補足し、また比較材料ともなるのである。

以上のような準備をふまえ、続く第三部(第六章、七章)、第四部(第八章、九章、終章)が本書の主要部となる。

第六章はワークショップの参与観察であり、身体と身体の間でのアフェクトの流動が焦点となる。山本萌は、オノマトペや言語的イメージ、あるいは太鼓などを使って参加者に様々なアフェクトを与える。例えば何か「硬いもの」を想像させ、その一例として「地蔵」が選び出されると、各自が太鼓に合わせて「地蔵になる」ことを試みる。その際、山本は地蔵が持っている最も重要なアフェクトとしての「硬さ」を強調し、各々の身体から「その『硬さ』の印象を受けたかどうか」を基準に判断を下す(144)。「地蔵」を真似るのではなく、「硬さ」のアフェクトに到達することが目的である以上、そこに端的な正解はない。また到達への筋道も各自に委ねられている。それでも他の何かに「なる」ことが目指される以上、自己の習慣から離れることが必須の要件となる。

ここで著者はドゥルーズ&ガタリの、馬からアフェクトを受けた子供が「馬になる」様子の記述を参照している。馬が歯をむきだしにするのを見て、子供は「足や脛やおちんちんなどを、手当たり次第むきだしにする」(『千のプラトー』)。子供が馬そのものになることはできないが、その子供が持っている身体や習慣に応じて馬のアフェクトを感受し、「馬になる」のである。もし舞踏のようにこれを意図的に行うとすれば、「自分の元々の位置や習慣が付いて来て、それらを無くすことはできない」、したがって「自分はどこの位置にあったのか、どのような習慣を持ってきたのかを認めつつ未知のアフェクトができるように挑むこと」が求められると著者はいう(146)。異なる身体と身体の間のアフェクトの流動とは、例えばこのように反省的あるいは重層的な出来事である。舞踏の実践とドゥルーズ&ガタリの言説を重ね焼きすることで、双方への具体的な理解が深められる、こうした考察が本書の特色である。

第七章では、踊り手の身体における「なること」を第三者が知覚するとはどういうことか、という難問が扱われる。例えばビショップ山田は、土方巽が体を細くして「壁に消える」という行為

をして見せた時、本当にそのように見えたという(177)。著者は、このような「見える」という経験に対して当事者はどのように信憑を調達しているか、という議論としてまとめている。

第八章と九章もワークショップの参与観察であり、舞踏の稽古における言語の運用とアフェクトの関係が軸となる。記号的な表象の典型ともいべき「言葉」が、アフェクトの生成においてどのように機能するのか。踊り手が経験したことのある物事を想像する場合と、経験したことのない物事を想像する場合ではアフェクトの生成の仕方がどう異なるか。1970年代の共同生活とは異なり多様な来歴を持ったワークショップ参加者たちはどのように言語的イメージを共有するのか——。舞踏の技法を合理的に理解しようとすれば、このような素朴な疑問が次々に現われてくるが、著者はそれらに正面から向き合い、丹念に解きほぐしていく。またそれらをふまえて著者が提示する、言語的イメージや言語的指導によってアフェクトを増幅する方法の四分類も興味深い(246-8)。すなわち明確さ(動きは明確にしようとすることができる)、流動(「なること」は能動的/受動的な可変性に開かれている)、多様性(アフェクトも「なること」への筋道も身体に応じて様々であり得る)、抵抗(動きに制限が加わることで努力が引き出され、濃密になる)である。

本書の論述は、注意深く繊細な観察と、抽象度の高い理論化への努力が密接に絡み合うため、決して読みやすくはない。また議論の展開について、読者の側はかなり能動的な読解を要求する面もある(ちなみに筆者には、第七章は「なること」ではなく表象が議論されているように思われてならない)。

それでもなお、アフェクトという概念が舞踏の技法を合理的かつ明瞭に言語化する上で相当に有効であること、また舞踏において実践されている身体技法がまさにドゥルーズ&ガタリの「生成変化」の具現化ともいべきものであるとともに、実践の現場から理論を批判的に鍛え上げる余地が豊かに見出せること等、本書の基本的な論旨には説得力があり、実に刺激的である。今後舞踏の技法を論じる上では必ず参照すべき研究であるのみならず、舞踏以外のジャンルの研究にも資するところが大きいはずである。

個人的に考えさせられたのは、アフェクトに着目して身体間の相互作用を読み解く著者の手法と、「わざ言語」(生田久美子)との親縁性である。本書ではふれられていないが、舞踏という特異な実践とその手法を媒介にすることで、両者の位置関係を考える可能性も開かれてくるのではないだろうか。

(京都大学学術出版会、2019年3月刊行)